



令和3年 5月 1日  
有松まちづくりの会

### 有松まちづくりの会役員会（4月26日）

日本遺産を活用して更にまちづくりを進めていきたいとの会長あいさつに続き、令和3年度有松まちづくりの会総会に向けた資料内容及び当日の役割分担についての話し合いが行われました。

### 有松に新パンフレット登場

**写真左：**絞りグッズ・絞り体験・グルメのお店が紹介されています。A5,12ページ。

**写真右：**町並み地図と見どころ施設11箇所+山車3輛が紹介されています。広げるとA3になる手のひらサイズ。



### お勧めスポット

有松小学校の塀と桜



### 寄稿 新しい史跡名勝標札～有松の町並みに仲間入り～

名古屋市文化財パトロール員 山村幸雄

有松に史跡名勝標札（以下、文化財標札という）を2基新設した（中濱家住宅、棚橋家住宅）。これで旧東海道沿いの有形文化財（住宅・山車庫など）に11基設置された。標札の解説を読んで文化財の理解を深めて欲しい。

有松の文化財標札の特色は町並みに合わせて木製で製作され、設置されている。他地域にも同じ仕様はあるが数は少ない。劣化防止の面で優位な金属製標札が多い中、町並みの景観に合わせてある。しかも市内で唯一「日本遺産のマーク」が添付されている。

さすが有松、落ち着いた町並みで品格がある。文化財標札を設置して、ビシッと決まった。

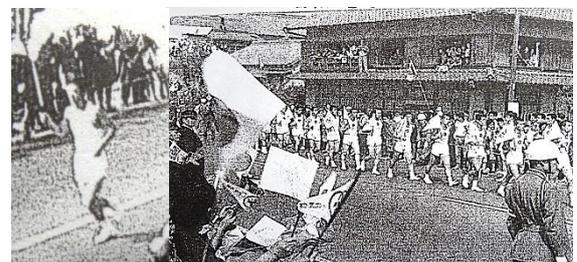
（写真上：中濱家住宅 写真下：棚橋家住宅）



### 懐かしの写真

新型コロナの感染再拡大の中、4月5日・6日愛知県内を2020東京オリンピックの聖火リレーが行われました。

前回、昭和39年(1964)の時は有松の国道1号線を通り、多くの人がお迎えしたとのことでした。



## 岡家住宅の公開

一昨年の6月から公開を始めた岡家住宅。コロナ禍によりお休みの時期もありましたが、検温・消毒を徹底して公開を続けています。建物自体の持つ素晴らしさが有松を訪れた皆さんを呼び込み、最近では月平均500人程の方が熱心に見学されています。

館内では、雛飾りやナナちゃん着用ドレス等時期に応じた展示物が皆さんをお迎えしています。



ナナちゃん着用の絞りワンピースとマスク

## 桜花学園 有松で現地学習（4月7日）

4月2日に入学したばかりの学生さんが有松を訪ねてくださいました。学芸学部英語学科の皆さん20名です（先生11名も同行）。観光について学ぶということもあるのでしょうか意欲的に町並み散策を楽しんで下さいました。1時間強の時間をかけて、松野根橋から西町まで、途中山車会館や竹田家住宅・岡家住宅に寄り見学されました。散策後は絞会館で絞り実習にも取り組まれました。「これからの学びの一助になれば」と案内されたあないびとの会の方は仰っていました。



竹田家住宅にて

## 3町の山車 虫干し（4月11日）

快晴のもと、3町の山車の虫干しが行われました。幕や提灯が所狭しと並べられている中、布袋車には屋根を囲むような部材が取り付けられていました（雨を遮る雨障子or油障子を取り付けるための物のようです）。唐子車では輪掛けが丁寧に拭かれ螺鈿が輝きを増し、神功皇后車では多くの提灯が祇園寺境内に干されてありました。例年4月日曜日に行われてきましたが、昨年は雨のため6月に延期されました。布袋車は更なる延期で10月にやっと虫干しができました。



布袋車



唐子車



神功皇后車



## 有松一里塚の清掃（4月20日）

3月2日雨天のため延期されていた清掃が、有松あないびとの会と有松まちづくりの会の皆さん30名程で行われました。夏日の中一里塚周囲の除草が行われ、ゴミ袋20個にもなりました。有松の一里塚は平成24年春に地元の要請により国土交通省が「復元」し、円形ブロック石垣に榎と笹が植えられています。



訪れた観光客と作業風景

## 特集 浴衣展 (3月26日~28日)

愛知県絞工業組合の指導の下、後継者育成の絞り技術者と組合員の協業により制作された有松・鳴海絞りの技法を使った絞り浴衣15点の展示会がありました。

そこには絞り技術者が確かに育ってきていることが感じられる場になっていました。多くは伝統的な藍染のもの。内8点は本藍染(写真中)で、四国徳島の矢野工場で染色されたとのこと。他は地元で染められました。また、化学染料で染めた作品(写真下右)は鮮やかな色合いでした。

制作期間は2ヶ月から半年。特に、本藍染は幾度も染液布をつけて染色が行われるため時間がかかるとのことでした。「絞った所から中への染みこみもなく、すぐに販売できるレベルの作品です」と、理事長竹田嘉兵衛氏は評価されていました。

### 〈後継者育成事業について〉

有松・鳴海絞りの後継者をきちんと育てていかなければ絞りの産地とはいえなくなるとの思いで、平成21年(2009)から育成事業が開始されました。現在訓練を受けている人と5年越しで修了された方、合わせて100名程の方が職人に育っています。

また、4月から新たに15名の方の訓練が開始されました。育成に当たっている山口善照氏は「育成中は横引き鹿の子絞りや三浦絞りという修得に時間がかかる絞りを中心に、更に多くの絞り技を学んでいます。昔の方は絞る機会が子どもの頃から多くありましたが、今は少なく、上手に括ってはいませんがなかなか速くできません」と育成の難しさを語っていました。

地元の方より名古屋市や遠方から通っている方がほとんどです。育成中は月2回、5年を経ると月1回「絞りLab」に来て学び、宿題や内職仕事を持ち帰ります。辞めずに続けている人が多いです。ある方は、「登山と似ていて、括り仕事はすぐには終わらないけど、やり終えたときの達成感が忘れられないです」と仰っていました。

同じく育成に当たっている名桐秋雄氏は、「育成事業の卒業生の中から、伝統工芸士を出すのが私の夢」と語っていました。



竹田家住宅



投稿 有松スケッチ 湯地昭夫氏

## 4 あないびとの会誕生

平成10年(1998)に有松駅前再開発が始まり、スーパー誘致・道路拡張・路線バス駅前乗り入れ・名鉄高架化等有松の風景が一変しました。その頃、愛知万博が開催されました。

私が現在活動している「有松あないびとの会」の活動の原点も、ここに 있습니다。愛知万博に来られたお客様をご案内しようという行政のかけ声の下、県内各地で観光ボランティアが立ち上がりました。有松でも、生涯学習センター有松分館で初代会長成田治氏を講師に勉強会が行われ、講座修了後に受講生とまちづくりの会町並み案内人グループが合流して2003年1月「有松あないびとの会」が誕生しました。

万博は好評を博して終わりましたが、有松にたくさん来ていただいたという実感はありませんでしたが・・・発足後は、毎年の絞りまつりなどでたくさんのお客様に町並みをご案内しています。近年は外国のお客様を案内する機会もあり、うれしいことです。



駅前再開発風景



講座の様子

町並み案内の様子

## 訃報

有松まちづくりの会の事業部長や副会長を務められ、有松あないびとの会初代会長の成田治氏が3月19日に亡くなりました。享年88歳。

あないびとの会現会長の加藤明美さんは、「大黒柱を失い、大変悲しく寂しい思いでいっぱいです。有松を愛してやまない成田さんは、最後に嵐絞りの浴衣をお召しになり、旅立たれたそうです」と、奥様からのお話を披露してくださいました。また、「悲しみを乗り越えて、更に有松の皆さんから愛されるあないびとの会にしていきたい」と、今後への思いも語ってくださいました。

## 催事・行事の予定

- 5月05日(水) 14:00 オカリナ・ジャズピアノライブ 棚橋邸
- 5月07日(金) 19:00 桶狭間古戦場保存会総会 桶狭間公民館
- ～5月9日(日) 有松・鳴海絞り鯉のぼり 有松東海道沿い
- 5月17日(月) 18:00 有松町並み相談会 コミセン
- 5月19日(水) 13:30 有松まちづくりの会総会 絞会館
- 5月23日(日) 07:30 かえで道清掃 有松まちづくりの会
- 〃 町内一斉町美活動
- 5月24日(月) 18:00 有松まちづくりの会役員会 コミセン

新型コロナウイルス感染拡大防止のため変更になる場合があります。

**お詫び** 有松かわら版前号(129号)に訂正が2か所ありました。

「有松まちづくりの会役員会」記事中、有松あないびとの会→有松まちづくりの会

甞る古楽器「9鍵の古典フルート」記事中、処分しようとの思いを止めたのは三井さんでした。



発行者:竹田嘉兵衛(有松まちづくりの会 会長)

編集者:加藤 一成(有松まちづくりの会 広報部員)

T・F 052-623-1676 090-4163-2671

E-mail katoisse@mc.ccnw.ne.jp

#### 4 見本裂 展示会場: 棚橋家住宅

たくさんの布見本が展示してありました。

##### 〈明治・大正時代の雪花絞りと豆絞りの見本裂き〉

三角形の木の板を使った板締めめの雪花絞りは、有松絞りの中でももっとも単純な技法です。カラーバリエーションも豊富で最もモダンな絞りとして現在注目を集めています。

明治11年(1878)に鈴木金藏氏により開発されました。生地を小さく同じ大きさに畳み、板で挟み、その一部を染料に短時間浸けて染め上げます。染め上がり雪の結晶のようになることから「雪花絞り」という名がつけられました。戦後間もない頃は、赤ちゃんの布おむつのために生産され、のちいろいろな色で染めたものがアフリカにも輸出されました。紙おむつ出現で生産は皆無。

平成7年(1995)張正さんが雪花絞りで浴衣の制作を始め、徐々に需要が増え脚光を浴びるようになってきました。配色のカラフルなモダンな絞り商品が出回るようになってきました。

また、張正さんは昭和30年代に豆絞りを復活させました。以前の工程は不明で、見本を見ると現在生産されているものとは柄が異なっています。

##### 〈昭和20年代の有松絞りのアフリカ輸出の絞り裂〉

有松では、昭和11年頃と昭和23年(1948)頃の2回、アフリカへ絞りを輸出しました。その時の見本帳が展示してありました。

戦時中燃料不足の中、絞りの道具を皆燃やしてしまった絞りの町が復活するきっかけになったのがこの輸出でした。一気に町が活気づきました。為替レートの変更で、1年半で採算が取れなくなり輸出は止まりましたが、復興の第一歩になりました。

総じて大柄のものが好まれたようです。

#### 5 加工工程紹介 展示会場: 有松山車会館

有松絞りの型紙が10点展示されていきました。絞り産業が拡大し同じ柄を量産するために必要とされ生み出されました。三重県白子市で生産され、薄紙を何枚も貼り合わせ柿渋を塗って作られます。昭和後期からより耐久性のあるポリエチレン製の透明な型紙が使われています。

#### 6 国際絞り会議紹介 展示会場: 旧山田薬局

国際絞り会議は、1992年に有松・鳴海地域で絞り関係者により開催された世界初の絞りの国際会議です。第2回以降世界各地で開催されてきました。第11回(2018)は山形を中心とした本会議と名古屋で6月27日から7月1日に開かれました。「日本の絞り」をテーマに、有松鳴海絞りの歴史的背景や技術的な解析を通して、価値観や創造性が紹介されていました。シンポジウム・ワークショップ・展覧会の様子がパネルで展示されていました。



雪花絞り

豆絞り



絞り道具いろいろ



先月号（かわら版129号）で、長らく有松で行われていなかった本藍染への挑戦が始まったことを伝える記事を書きましたが、本藍染についてもっと知りたいとの声をいただきました。調べて分かったことをお知らせします。

明治時代の初めに来日した外国人の一人が、藍の色に溢れる日本の様子を「ジャパン・ブルー」という言葉で表わしています。木綿の普及と紺屋の増加、とりわけ徳島での藍生産が広まるにつれて、江戸時代には藍染の衣服や製品が広く社会に行き渡っていました。

その天然藍の色は、繰り返し染液に布をつけることで徐々に青色が深まります。多様な色の広がりを見せています。青色が深まるにつれて現れる様々な色に名が付けられています。例えば、糸が一度藍甕を覗いたところから付けられた「甕覗き」、淡い色の「浅葱(あさぎ)色」、そして濃い黒に近い「勝色」などなど。「勝色」は勝の字から武士に好まれた色だったそうです。

このような天然灰汁発酵建ての藍染は、明治時代に入ると徐々に行われなくなりました。

藍染は古くから世界各地で広く行われてきました。藍という染料は、様々な植物に含まれています。日本ではタデ科の藍、インドではマメ科の藍、ヨーロッパではアブラナ科の大青(たいせい)で染めます。蓼(たで)藍は色素を抽出するのが難しく、菜(すくも)に木灰を加えて発酵させる方法(藍建て)が考え出されました。そして、やがて徳島の藍が全国を制覇するようになりました。

しかし、江戸時代末に廉価なインド藍が日本に伝わってきました。熱帯地方で育った凝縮された密度の濃いものでしたので、蓼藍に取って代わりました。更に、1860年代にヨーロッパで石炭のコールタールから製造する化学藍が発明され、やがて日本に入ってきました。有松では1901年(明治34年)にインジゴピュア、いわゆる化学藍が使われるようになりました。

取り扱いが難しい本藍染は行われなくなりましたが、天然藍のもつ美しさや色の多様性を尊ぶ人が近年ますます増えてきているようです。

### 〈竹田嘉兵衛会長のお話〉

「本藍染とは江戸時代の化学物質を一切使わずに染めるやり方です。有松では現在、誰もやっていません。せめて1ヶ所だけでも取り組もうと挑戦しました。蓼藍の染料成分であるインジゴの含有量は5%程。インド藍は50%程。化学藍は100%で確実に染めることができますが、色合いは少し異なります。

江戸時代どのように染めていたのか正確には分かりませんが、徳島の矢野藍秀氏は長年本藍染に取り組まれてきました。(写真上) 近々有松に来ていただいて、やり方を教えていただこうと考えています。矢野方式に学び、有松でも化学物質を絶対使わずにやってみたいと思います。3月3日の藍甕びらきはその第一歩。ほぼ同じやり方で、まずは自分たちでやることにしました。」

**訂正のお願い：**先月号の特集記事で、染色で空気に触れると「茶色から青色に変わり」に直してください。



(有)本藍染矢野工場の様子